

愛される変人として生きる： HIKARIクリニックの発達障 害支援

2009年に岡山駅前が開業したHIKARI CLINICは、心療内科・精神科クリニックとして地域医療に貢献してきました。2014年からはうつ病リワークプログラムを開始。その中で再休職を繰り返す患者の多くが発達障害傾向を有することに気づいたことをきっかけに、成人の発達障害専門外来と支援プログラム「HAG（Hikari Autism support Group）」を立ち上げました。

当クリニックの理念は「診断すること」や「定型に近づけること」ではなく、「自己理解を通して、自分のままで他者と関われること」です。"愛される変人として生きる"ことをサポートする取り組みについて、ご紹介します。

医療法人啓光会 HIKARI CLINIC 遠迫 憲英



発達障害診療の基本理念

本人の気づき

自分自身が生きづらさの原因として発達障害の可能性に気づいていること。周囲や家族の薦めでも、本人の希望がないと検査は行いません。

特性の理解

診断結果や支援計画について、ご本人が十分に理解し納得できるよう、丁寧な説明と対話の時間を確保します。

関係性の形成、診断と支援が一体となったサポート

医療者と患者間の関係性を重視し、特性についてフラクに話あえる関係性を築くことを重視します。決して非難されていると感じるのではなく、特性を自分の持ち味として自分らしく生きられる方法をサポートします。

当院では、発達障害を「変えるべき障害」ではなく、「関係性の中で育ちうる特性」として捉えています。診療においては、ご本人の語りに耳を傾け、その人らしさを大切にした支援を心がけています。





発達障害外来のフロー

初診時の丁寧な聴き取り

既往歴、主訴、適応問題について
30～60分かけて詳細に聴取しま
す。

発達障害特性の自覚に至った経緯
についても丁寧に伺います。

検査結果のフィードバック

医師が直接、検査結果を30分以上
かけて説明します。

DSM-Vの診断基準に基づき、ご家
族同席のもとで丁寧に行います。

1

2

心理検査の実施

心理士による生活史の聴取とAQJ、
CARRS、WAISIVなどの検査を行いま
す。計2回

3

可能であれば家族にも同席いた
だき、成長記録も参考にします。

4

支援計画の策定

薬物療法や心理教育、HAGプログ
ラムなど具体的な支援を提案しま
す。

就労支援や社会資源の活用につい
ても説明し、ニーズに合わせて調
整します。

初診時の丁寧な聴き取り



生活歴の聴取

幼少期から現在までの生活環境や重要なライフイベントについて、時系列に沿って丁寧に聴き取ります。



発達歴の確認

言葉の発達、運動発達、対人関係の形成過程など、発達の特徴について詳しく伺います。



社会適応状況の把握

学校生活や職場での困りごと、対人関係でのつまずきなど、社会生活における適応状況を確認します。



家族関係の理解

家族歴、家族との関係性や家庭内での役割、家族からの理解度などについても詳しく伺います。

初診では30～60分かけて、ゆっくりとお話を伺います。患者自身がこういった経緯で自分自身が発達障害と考えるに至ったか、ご本人の体験や感じていること聞き取ります。多くの方に二次障害としての合併症があり、その場合は合併症の治療をまず優先します。



心理検査の実施と意義

WAIS-IV

発達特性を視覚的、客観的に知ることは、自分の問題点に気づき、障害が受容しやすくなります。得手不得手を具体的に把握しやすくなります。

CAARS

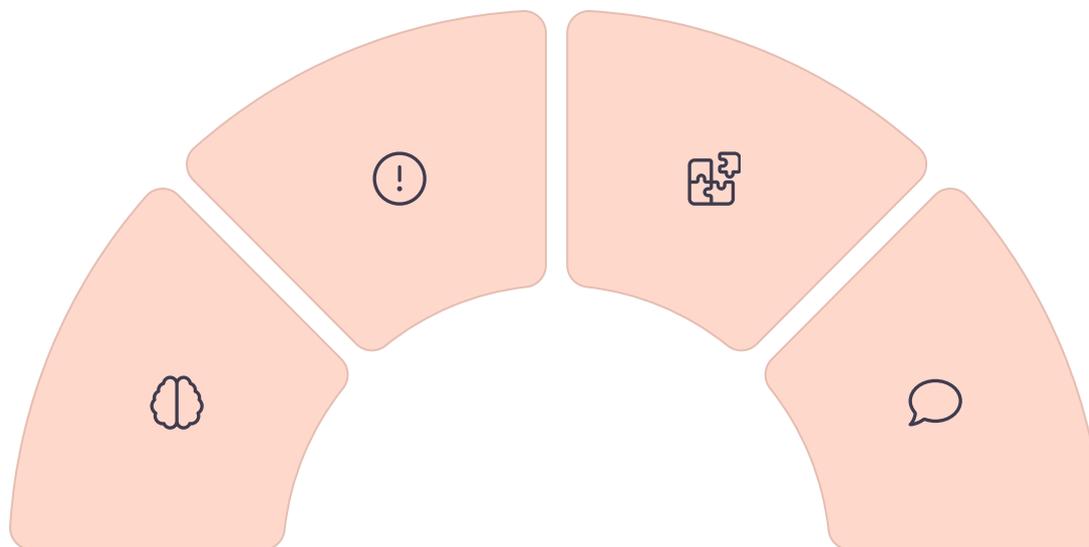
成人のADHD症状を評価するための検査です。不注意や多動性、衝動性などの特性を客観的に測定します。

AQ-J

自閉スペクトラム症の特性を測定するための質問紙です。社会性や細部への注目などの傾向を評価します。

生活史聴取

心理士による詳細な生活史の聴取を通して、発達特性が日常生活に与える影響を多角的に理解します。成績表、母子手帳、親族からできる限る病歴を聴取します。



心理検査は2回に分けて丁寧に実施します。検査の目的は診断にとどまらず、その方の強みや特性、困りごとの背景を総合的に理解し、より適切な支援につなげることにあります。

【その他の検査】

AQ-J 32点 (カットオフポイント33点)

CAARS 不注意、衝動性の項目が平均よりも高くみられた。
(矛盾指数6点)

【総合所見】

○認知面、処理プロセスなどの特徴 (指標得点の特徴)

・言葉の知識は豊富で、自分の考えや思いを言葉で説明することは得意なようです。また、言葉から理解することもできます。(言語理解：VCI)

・手本などの視覚情報を参考に、考えたり判断することはできますが、瞬間的に反応することが多く、解答を訂正する場面が多かったです。(知覚推理：PRI)

・耳で聞いたことを集中して記憶することは苦手なようです。(ワーキングメモリー：WMI)

・手先を使って効率よく作業を行うことは苦手なようです。ミスが生じていたり、作業が複雑になると効率が落ちていました。(処理速度：PSI)

【支援の方針と内容】

言語理解 (VCI) は平均より高く、他の能力よりも有意に高いという結果でした。言葉の知識は豊富で、自分の考えや思いを言葉で説明することは得意なようです。また、言葉から理解することもできます。学生時代の友人関係などから、特に好きなことを通してのコミュニケーションが得意なようです。知覚推理 (PRI) は平均の上という結果でした。視覚情報を処理することはできていましたが、瞬間的に反応して後から訂正する場面も多く見られました。検査中も制限時間のことを気にされており、焦りの気持ちも強かったようです。視覚情報を扱う時は、落ち着いて作業をする方がよいでしょう。ワーキングメモリー (WMI) は平均内で、他の能力よりも有意に低いという結果でした。耳で聞いた情報を集中して記憶することは苦手なようです。検査中も教示内容を繰り返し確認したり、集中して記憶することが難しい様子でした。口頭での指示や説明は一つずつ伝えてもらう方がよいでしょう。処理速度 (PSI) は平均内で、他の能力よりも有意に低いという結果でした。作業はミスが多かったり、作業が複雑になると効率が落ちていました。マルチタスクや効率を求められると、ミスが生じやすい可能性があります。また、ご本人の焦りが強いことで不注意のミスが生じやすい場面がありました。仕事上でも「ミスが多い」という困りごとは、処理速度の苦手さが影響している可能性があります。

<対策例>

- ・視覚情報を参考にする際は、時間をかけてじっくり取り組む方が能力を発揮しやすい。
- ・口頭での指示や説明は一つずつ伝えてもらう、メモに取るなど視覚化する。
- ・作業を行う時は、シングルタスクをコツコツ行う。作業後はミスがないか確認する。
- ・作業を行う時は、焦らず落ち着いて行う。

検査結果のフィードバック



結果のまとめ

心理師が検査結果をA4用紙2枚にまとめ、簡潔に患者さんにもわかり易い検査結果を作成します。専門用語を避け、日常生活に即した表現を心がけています。



丁寧な説明

医師が検査結果について、ご本人が理解しやすい言葉で丁寧に説明します。検査結果にこの段階で納得する人も多いです。質問や疑問にもしっかりと時間をかけて対応します。



家族への共有

必要に応じてご家族にも同席いただき、特性についての理解を深めていただきます。ご本人の了承を得た上で、家庭での接し方についてもアドバイスします。



今後の支援提案

検査結果を踏まえた上で、今後の治療方針や利用可能な支援サービスについて提案します。ご本人の希望や生活状況に合わせた個別の計画を立てていきます。

発達障害診療に我々が取り組み始めた際に、検査結果のあまりにも複雑怪奇な内容に戸惑ったものでした。他院で検査を受けた患者さんで、検査結果を理解している方は皆無でした。我々は患者さん自身が理解できる言葉で語られる検査結果の開発からはじめました。

HAGプログラムの概要



プログラム構成

全12回、毎週火曜日、各回2時間



参加人数

最大9名の参加者と複数名の支援スタッフ



プログラムの特徴

安全な場での自己理解と相互理解

HAG（Hikari Autism support Group）は、当院が独自に開発した発達障害のある方のためのグループ支援プログラムです。参加者同士が互いの特性を理解し尊重し合いながら、自分らしい生き方を見つけていくことを目指しています。集団精神療法とギフト教育の理念に影響を受けています。

プログラムでは「話さなくてもよい自由」を保障し、無理に発言を求めることはありません。それぞれのペースで参加できる安心感を大切にしています。自分の特性と向き合い、新たな自己像を見つける旅に参加してもらいます。



HAGプログラムの前半（第1回～第4回）

ガイダンス（第1回）

プログラムの概要説明や参加者同士の簡単な自己紹介を行います。特に「場の安全性」と「話さなくてもよい自由」について丁寧に説明し、安心して参加できる環境づくりを行います。

ASDの心理教育（第2回）

自閉スペクトラム症の特性について、最新の知見を踏まえてわかりやすく解説します。「障害」ではなく「特性」として捉え直す視点を提供します。

ADHDの心理教育（第3回）

注意欠如・多動症の特性について学びます。日常生活での困りごとの背景にある脳の特性について理解を深めます。この2回で参加者たちが特性を共有し、自分が孤独ではないことを学びます。

ストレスマネジメント（第4回）

発達特性からくるストレスへの対処法を学びます。自分に合ったリラクゼーション法や気分転換の方法を見つけていきます。

HAGの前半では、発達障害についての正しい知識を身につけながら、自分自身の特性を客観的に理解するための基盤を作ります。知識を得ることで「自分だけがおかしいわけではない」という安心感を持つことができます。



たこ焼きパーティ（第5回）

役割を決めない共同作業

参加者全員でタコ焼きを作りますが、あえて役割分担を決めません。それぞれが自分のペースで、できることに参加する体験をします。

空気を読まなくても良い自由

パーティが苦手なことは百も承知です。役割を果たす人もいれば、ホワイトボードに絵を描き始める人もいれば、スマホでDJを始める人もいます。手伝わないことも自由です。やりたいようにできる自由が保障されます。

共に食べる喜び

完成したタコ焼きを一緒に食べることで、達成感と一体感を味わいます。食事を共にすることで、より自然な会話や交流が生まれやすくなります。

通称「タコパ」と呼ばれるこの回は、HAGプログラムの中でも特に重要な位置を占めています。役割を持たずに共にいる体験を通して、「ありのままがいい」という安心の土台を築きます。

この体験は、その後の「モットー決め」など、より深い自己開示が必要なワークへの準備段階としても機能しています。楽しみながら自然に関わりを深められる貴重な機会です。



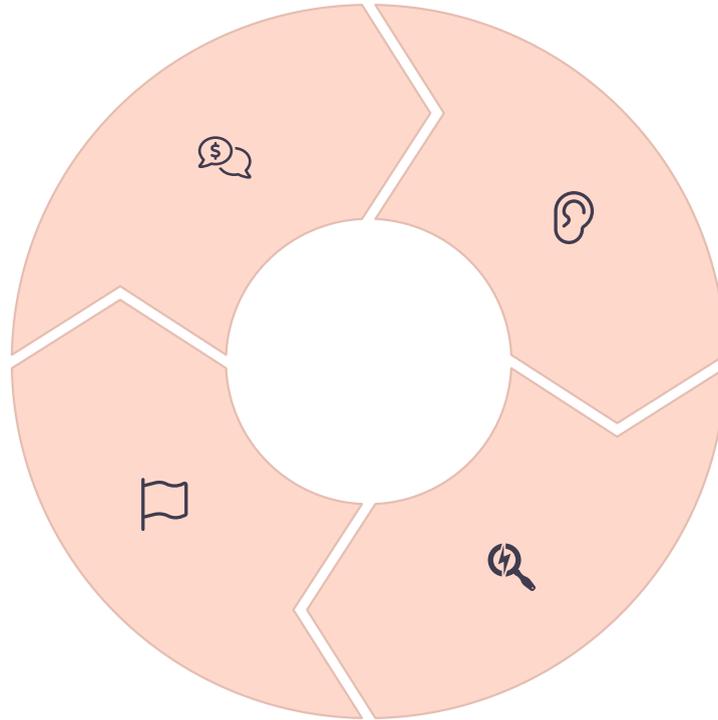
モットー決め（第6回～第8回）

自己語り

自分の特性や悩み、これまでの体験などを、グループの中で語ります。無理に話す必要はなく、聴くことだけの参加も大切にされます。

モットーの決定

自分を一言で表す「モットー」を決めます。例えば「エゴイスト未完成人間」「地震説が起こっても6B」みんなが親身になって相談に乗ってくれた記憶の「**ことばのお守り**」。



グループからのフィードバック

語りを聞いた他の参加者やスタッフから、「**善かれ性**」というルールに基づき、共感や気づきのフィードバックを受け取ります。「あなたはそのままがいい」というメッセージが伝えられます。

自分の言葉を探す

語りとフィードバックを通して、自分自身を表現する言葉を探していきます。これまで言語化できなかった思いや自己像に言葉を与えていきます。

「モットー決め」はHAGプログラムの核心部分です。3週間かけて、じっくりと自分自身と向き合い、自分を肯定的に表現する言葉やシンボルを見つけていきます。このプロセスを通して、グループの凝集力が高まり、多くの参加者が自己評価の肯定的な改善を経験します。

モットー劇場orサイコドラマ (第9回)



身体表現への昇華

言葉で表現したモットーを、身体を使って表現します。言葉だけでは伝えきれない感情や自己イメージを、動きや表情、姿勢などを通して表現していきます。

モットー劇場では、言葉にならなかった感情や自己イメージを身体的に表現することで、"伝わった"という実感を得ることができます。特性による"ズレ"を否定するのではなく、ズレたままでも関われる体験を提供するものです。



即興劇の活用

サイコドラマの手法を取り入れた即興劇を通して、日常生活の課題や望ましい対人関係のあり方を体験的に探索します。想定外のシュールなドラマが生まれます。演じることで新たな気づきが生まれます。



グループの支持

表現する人をグループ全体で支持し、安全な場で自己表現を試みる勇気を称えます。「見られている」という不安ではなく、「受け入れられている」という安心感を体験します。

自分トリセツの作成（第10回）

「自分取扱説明書」の略で、自分自身の特性や対応方法をまとめた自分のマニュアルです。これまでのHAGで得た自己理解をもとに、自分の特性を客観的かつポジティブに整理します。



自分トリセツとは

自分の強みや弱み、コミュニケーション上の特徴、疲れたときの兆候と回復方法、助けてほしい時の伝え方など、具体的な内容を盛り込みます。

トリセツの活用方法

完成したトリセツは、信頼できる家族や友人、職場の理解者に共有することで、良い関係構築に役立ちます。「こんな風に接してもらえると助かります」という具体的なリクエストを伝えることができます。

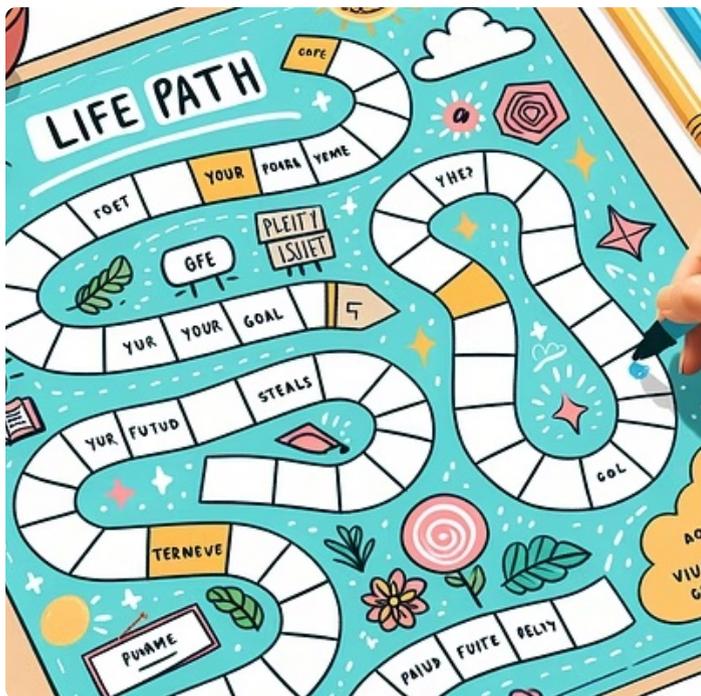
自己理解の深化

トリセツ作成の過程では、自分の特性を「欠点」ではなく「個性」として捉え直す視点の転換が起こります。自分自身の特性、長所短所を客観的に捉え、他人に説明することができるようになります。

参加者の反応

自分と他者の架け橋となる大切なツールとして、実用的かつ創造的なこのワークは、具体的な対処法を言語化することで、自分自身の調整力も高まります。

人生すごろく（第11回）



「人生すごろく」では、これまでの人生を振り返りながら、未来への展望を視覚的に描いていきます。紙の上に自分だけのオリジナルすごろくを作成し、過去の重要なイベント、現在の位置、そして未来への希望や目標を表現します。

このワークを通して、これまでの人生の中で乗り越えてきた困難や達成した成果を再確認し、自分の強さや成長を実感することができます。また、仲間とすごろくを共有することで、お互いの人生への理解を深め、新たな視点や可能性に気づききっかけにもなります。

フリーミーティング（第12回）

12

セッション

共に過ごした時間の振り返り

9

参加者

それぞれの成長と変化



可能性

プログラム終了後の新たな一歩

HAGの最終回は、これまでの全体の体験を統合するフリーミーティングとして開催されます。12週間の旅を振り返り、自分自身や他の参加者の変化や成長について共有します。自由な対話を通して体験を意味づけていきます。

修了証の授与も行われ、一人ひとりの成長を称えます。また、プログラム終了後も継続的な支援を受けられる「HAG-O」の案内や、次のステップについての情報提供も行います。フリーミーティングは終わりであると同時に、新たな始まりの機会でもあります。



HAGがもたらす変化：特性への肯定感



HAGプログラムでは、発達障害の特性を「変えるべき欠点」ではなく「その人らしさの一部」として捉え直すプロセスを大切にしています。参加者は、自分の特性に対する見方が徐々に変化し、「これも含めて自分自身」という肯定感を獲得していきます。

特に「モットー決め」のプロセスでは、他者からの肯定的まなざしを受け取ることで、自己評価が肯定的に改善するケースが多く見られます。苦手なことへの対処法を学びながらも、自分の強みや個性を再発見することで、バランスのとれた自己理解が深まっていきます。

HAGがもたらす変化：共在への安心感



「一緒にいるだけ」の体験

HAGでは、積極的な交流や会話を強制されることはありません。黙ってその場にいるだけでも、十分に参加している状態として尊重されます。この「共にいるだけでいい」という体験が、対人関係における大きな安心感につながります。



安全な場の保証

批判や否定を受けない場であることが明確に保証されています。失敗や「空気が読めない」発言を恐れずに過ごせる環境が、徐々に対人緊張を和らげていきます。



互いの特性への理解

参加者同士がお互いの特性を理解し、配慮し合う関係性が自然と生まれます。「説明しなくてもわかってもらえる」体験は、社会での孤立感を軽減します。

発達障害のある方にとって、他者と共にいることは大きなエネルギーを必要とする場合があります。HAGでは、無理なく共にいられる体験を積み重ねることで、「無理をしない」「話したい時に話せば良い」「自分のペースを保ちながら関われる」という気づきが生まれます。



HAG修了後の変化①：自己説明力の向上



家族への説明

HAG修了者の多くは、家族に対して自分の特性をより明確に説明できるようになります。「なぜ特定の状況で困難を感じるのか」「どのような配慮があると助かるのか」を具体的に伝えられるようになることで、家族関係が改善するケースが多く見られます。



職場での配慮依頼

職場において必要な配慮を適切に依頼できるようになる方も増えています。「自分の強みを活かす働き方」と「困難を軽減するための環境調整」を、建設的に提案できるようになります。



医療機関での伝達

他の医療機関や支援機関を利用する際にも、自分のニーズを的確に伝えられるようになります。「自分トリセツ」を活用して、新しい支援者との関係構築がスムーズになります。

HAGを通じて「自分を言葉で説明できるようになった」という声は非常に多く聞かれます。特性について客観的に理解し、それを適切な言葉で表現できるようになることは、社会になかで自分の居場所を確保することに役立ちます。

HAG修了後の変化②：社会接続の促進



安全基地の確立

自己理解と受容の深まり



仲間との関係構築

小さな社会的成功体験



職場・学校での適応

特性に合わせた環境調整、配慮の要請



社会参加の拡大

自分らしい生き方の実現、なりたい自分への援助、好きなことを仕事にする。

HAGプログラムは、社会接続の準備段階として重要な役割を果たしています。自己理解を深め、仲間自らの社会への関わり方を模索することで、自分の特性や好きなことを軸に、社会参加してゆく契機になります。

修了者からは「自分の好きなことを思い出した」「自分の特性に応じた配置をしてもらえた」「新しい趣味のコミュニティに参加できた」など、社会参加の広がりを示す声が多く寄せられています。HAGは「安全な巣」であると同時に、そこから外の世界へ飛び立つための「発射台」としての機能も持っています。



HAG卒業生グループ「HAG-O」

自由参加の継続支援

HAG修了後も継続的な支援とつながりを保つことができる、卒業生のための自由参加型グループです。月に2回程度の頻度で開催され、仲間と課題を共有する場となっています。

ピアサポートの場

専門家による支援だけでなく、同じ経験をした仲間同士で支え合うピアサポートの要素も大切にしています。長期的な関係性の中で、互いの成長を見守り、励まし合う関係が育まれています。

社会資源との橋渡し

PSWは重要なHAGの要素です。就労支援機関や障害福祉サービスなど、地域の様々な社会資源との橋渡しも行っています。必要に応じて、個別の状況に合った支援先を紹介し、スムーズな連携を促進します。

HAG-Oは卒業生という意味の他に、「Open」「Ongoing」「Original」の意味を込めた名称です。開かれた場で、継続的に、それぞれのオリジナルな生き方を模索していくコミュニティを目指しています。毎回目的のあるワークと、テーマのないフリーミーティングを行なっています。日常生活のなかで孤独に陥ったり、仲間と無理なく交流したいメンバーが自由に集まります。





働く人のための簡易版「HAG-B」

簡易版プログラムの特徴

「HAG-B」働きながらHAGに参加したい方や、短期間での支援を希望される方のために開発された簡易版プログラムです。全4回の構成で、エッセンスを凝縮した内容となっています。

特性理解に特化した内容

通常のHAGよりも特性理解に特化した内容になっています。心理検査を傍らに、ASD、ADHDの特性理解、「自分トリセツ」の作成を行います。

夜間・週末開催

平日の夜間や週末に開催することで、働きながらも参加しやすい時間帯に設定しています。1回あたりの時間は2時間です。

HAG-Bでは、自分自身の特性理解と、他人に説明ができるようになることを重視したアプローチとなっています。自分一人での理解では自己否定的なことが多く、マイナスの面ばかりに目が行きがちになります。グループを利用することで、特性の肯定的側面に気づくようになります。



AIによる検査支援の概要



生成AIの活用

WAIS-IVなどの心理検査結果と詳細な生活史情報を生成AIに入力し、所見や合理的配慮案を自動生成する取り組みです。医師や心理士の時間的負担を軽減しながら、質の高い検査フィードバックを提供することを目指しています。



カスタマイズ文書

AIによって出力された文章は、患者の職業や理解力に合わせてカスタマイズできます。専門用語を避け、日常生活に即した具体的な表現に変換することで、「読める診断」「使える支援文書」として活用できます。



専門家による確認

AIの出力は必ず心理士・医師が最終確認を行います。AIの網羅性と専門家の臨床的判断を融合させることで、診断の精度向上、見落としの補完、検査レポート作成の効率化を実現しています。

当院では2025年から試験的に導入し、今後検査フィードバックの標準的なプロセスとして確立してゆきます。心理師と医師の診断では見落とされていた学習障害の指摘がAIから行われたこともあり、圧倒的な検査の省力化と効率化が期待されます。

WAIS結果

XXXXXXXXさんの発達特性について（ご本人向け説明）

●概要

XXXXXXXXさんが受けられた WAIS-IV という検査や、これまでの話から、以下のような特性が見られました。

これは「性格」ではなく、生まれ持った「脳の働き方のくせ」や「情報処理のスタイル」に関わるものです。

●得意なこと（あなたの強み）

- ・抽象的な理解力や、物事の意味を考える力がしっかりあります（言語理解：VCI 98）。
- ・図形や構造を読み解く視覚的な推理力も平均的で、空間認識にも問題はありません（知覚推理：PRI 99）。
- ・数字の記憶や短時間の集中力にも大きな問題はなく、注意が向いたときは記憶の保持が可能です（ワーキングメモリ：WMI 94）。
- ・人の気持ちや場の空気を読む力があることから、「雑な人」とはまったく逆で、丁寧さや誠実さが強みといえます。

●苦手になりやすいこと（今つまづいている理由）

- ・情報を「スピーディに処理すること」に強い負担があります（処理速度：PSI 77）。
- ・特に、同時に複数のことをこなしたり、急いで作業したりすると混乱しやすくなります。
- ・「忘れたらどうしよう」「間違えたらダメ」と思うあまり、確認行動が多くなり、結果として時間がかかりすぎる傾向があります。
- ・本人は「ちゃんとやろう」としているのに、周囲には「遅い」「要領が悪い」と誤解されてしまう場面が増えます。

●診断について

- ・以上のような特性から、注意欠如・多動症（ADHD）-不注意優勢型と考えられます。
- ・それに加えて、強迫性障害（OCD）の傾向も見られ、何度も確認してしまう行動や、「こうしなきゃ」という強い思いが生活を難しくしている部分があります。

●これは「性格」ではありません

- ・これらは意志の弱さや能力不足ではなく、脳の認知機能のバランスによるものです。

* ADHDやOCDは努力ではどうにもならない部分があるため、自らの必要はありません。

・適切な配慮や環境調整、そして時にはお薬の助けによって、力を発揮しやすくなることが多くあります。

●今後のサポートについて

- ・作業の手順が見える化すること（マニュアルやチェックリストの活用）
- ・作業時間や順序を自分で調整できる環境を作ること
- ・薬物治療や心理的サポート（認知行動療法など）も併用していくこと
- ・周囲の理解と協力を得ること（職場への説明と合理的配慮）

●まとめ

この特性は「あなたの個性の一部」であり、良い・悪いではなく「どう活かすか」が大切です。

ご自身を責めることなく、適切な方法で支援を受けながら、無理なく力を発揮できるよう一緒に考えていきましょう。

合理的配慮を求める支援計画書(職場提出用)

合理的配慮を求める支援計画書(職場提出用)

氏名: ████████

年齢: 28歳

職種: ME(臨床工学技士)

提出日: 2025年0月0日

作成者: ○○精神科クリニック/主治医: ○○○○(精神科医)

1. 背景および診断に関する情報(機密情報)

██████さんは、当院での検査および面接評価により、以下の特性・診断傾向が認められています。

- 発達特性(注意欠如・不注意優勢型ADHD)
- 併存障害としての強迫性障害(OCD)傾向
- WAIS-IVにおいて、言語理解や知覚推理には平均的能力がある一方、処理速度に著しい遅れ(PSI=77)が確認されており、これが作業遂行における時間の過剰な消費や反復確認行動の増加につながっています。

2. 現在の職場での困難

医療現場という緊張度の高い環境下において、以下の困難が報告されています:

- 手順や確認作業を繰り返すことで、ルーチン業務に過剰な時間がかかる
- 曖昧な指示や即時の判断が必要な場面での実行機能の負荷
- 結果として、「仕事が遅い」「段取りが悪い」と誤解されやすく、上司・同僚との関係に支障
- 解雇勧告の可能性が示唆されるほどの緊張状態にある

3. 医療的な見解と支援の必要性

- これは怠惰や能力不足ではなく、神経発達症に由来する認知特性に基づく現象です。
- 適切な環境調整と配慮があれば、誠実で丁寧な業務遂行能力を発揮できる人材です。
- 強迫症状を含む不安の二次障害は、環境的圧力が緩和されることで改善が期待できます。

4. 求められる合理的配慮

項目	配慮内容の提案
業務配分の調整	作業量の調整(複数工程を分けて指示、ペース配分の緩和)
手順の明確化	口頭ではなく、視覚的な手順書やマニュアル化されたリストの提供

	(急変対応業務からの一時的回避含む)
フィードバックの方法	「遅さ」を責めるのではなく、改善点を構造化して伝える方法の採用
心理的安全性の確保	上司・同僚とのコミュニケーション支援(メンターの設置等)
定期的な面談機会	精神的負荷やストレスの早期察知と対処のための面談(月1回程度)

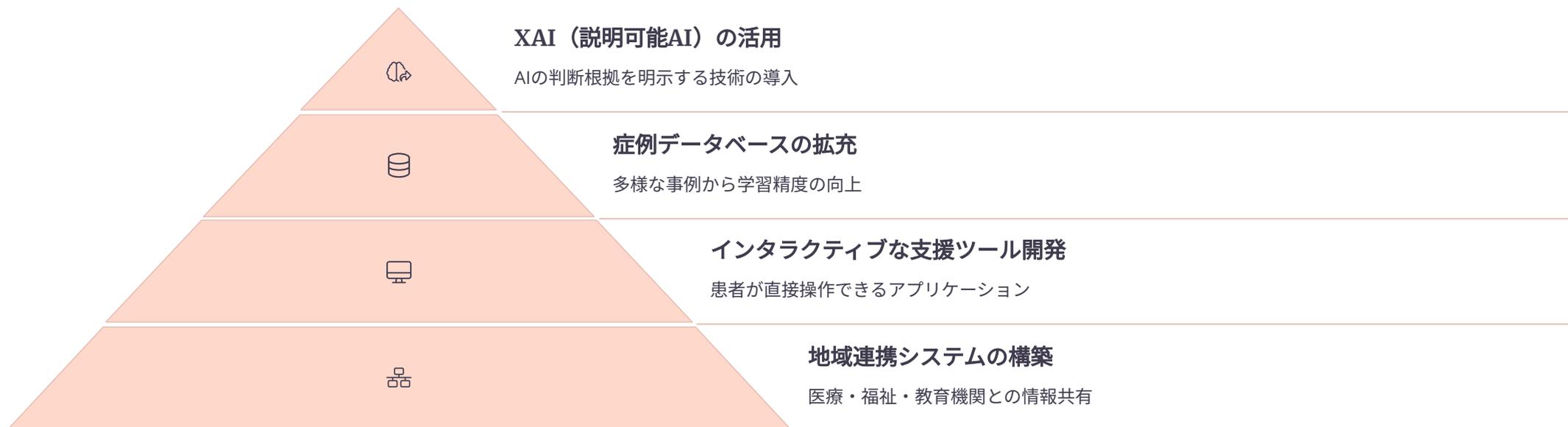
5. 支援期間と再評価

支援の初期段階として3か月間の合理的配慮の試行期間を設けていただき、その後、職場と連携しながら状況を再評価することを提案いたします。必要に応じて、主治医や臨床心理士との連携を図ります。

6. 備考

本支援計画書は、██████さんの就労継続を目的としており、本人の業務遂行能力を引き出すための構造的支援の提案です。職場での適応が進むことで、強迫症状の改善・薬物依存性の低下にも寄与します。

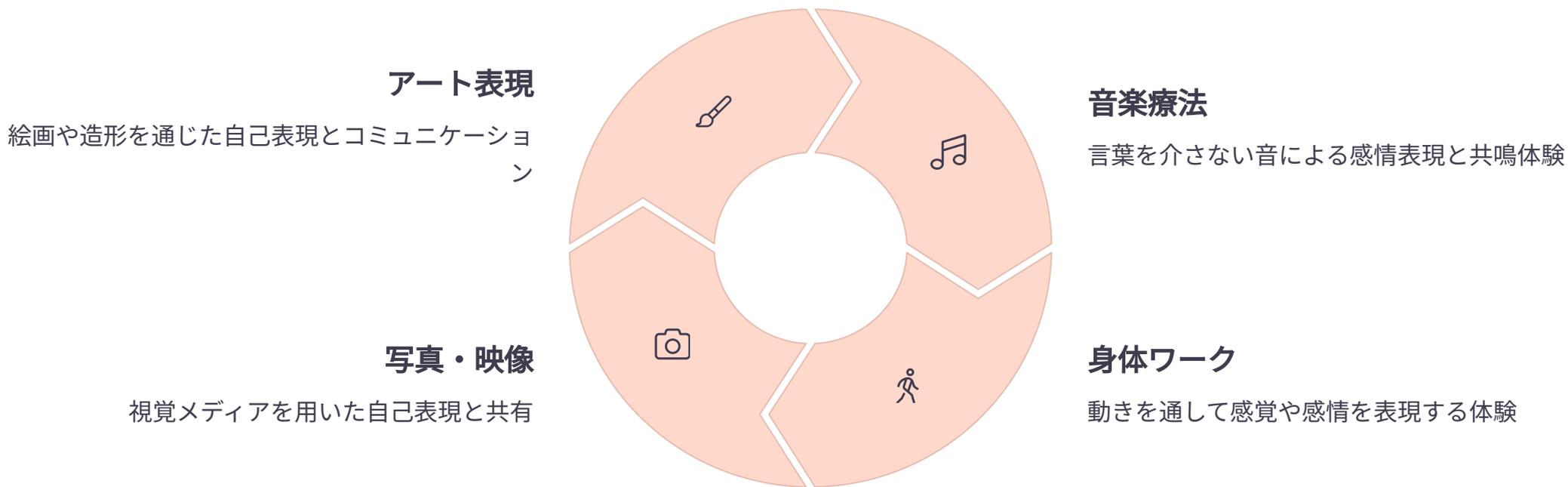
AIを用いた検査支援の今後の展望



当院では今後、XAI（説明可能AI）技術を応用した検査解釈の透明性向上に取り組む予定です。AIがどのようなデータや特徴に注目して判断したのかを明示することで、専門家と患者の双方にとって理解しやすい説明が可能になります。

また、蓄積された症例データベースを活用し、年齢や職業、生活環境に応じたよりパーソナライズされた支援提案ができるシステムの開発も検討しています。テクノロジーの進化を取り入れながらも、人間同士の関係性を基盤とした支援の質を高めていくことが私たちの目標です。

しゃべらないHAGの開発構想



現在開発中の「しゃべらないHAG」は、言語コミュニケーションに困難を抱える方や、言語的な自己表現に強いストレスを感じる方向けの新しいプログラムです。アート、音楽、身体ワーク、写真などの非言語的表現を中心としたクリエイティブなアプローチにより、言葉を介さない自己理解と相互理解を目指します。

このプログラムでは、「言語化できないことへの不安や焦り」から解放され、多様な表現方法を通して自分らしさを探求します。言葉よりも感覚や直感を重視する方にとって、より自然な形での自己表現と他者とのつながりの場となることを期待しています。

当院の発達障害支援の理念



そのままを肯定する

特性をその人らしさとして受け入れる

2

関係性を育む

安心できる関わりを基盤にする



多様性を活かす

強みを伸ばし社会に貢献する、居場所を作る。

HIKARI CLINICの支援は、「診断すること」や「定型に近づくこと」ではなく、「自己理解を通して、自分のままで他者と関われること」を目指しています。発達障害を「変えるべき障害」ではなく、「関係性の中で育ちうる特性」として捉え、そのまま"共に生きられる"社会的臨床の構築を追求しています。

HAGはこの理念を象徴する実践であり、"そのままでも受け入れられる"場で、"自分自身でいられること"を身につけてゆくプロセスを支えています。私たちは、一人ひとりの特性に合わせた個別的なアプローチと、社会環境を調整する包括的な視点の両方を大切にしています。

地域でのネットワーク構築



就労支援機関との連携

ハローワークや就労移行支援事業所など、就労支援に特化した機関との連携を深めています。定期的な情報交換や事例検討を通じて、医療から就労へのスムーズな移行を支援します。PSWが活躍します。



教育機関とのつながり

地域の学校や大学と連携し、発達障害のある学生への支援体制について協議しています。臨機応変の特性についての説明や、診断書や配慮事項への意見書なども作成します。



福祉サービスとの協働

障害福祉サービス事業所や相談支援専門員との協働により、生活面での包括的な支援体制を構築しています。医療だけでは対応できない生活課題に対しても、適切な支援につなげられる体制を整えています。

発達障害のある方の支援は、医療機関だけで完結するものではありません。当院では地域の様々な機関とのネットワークを構築し、生活全般を支援を実現するよう努めています。多職種・多機関が連携することで、一人ひとりのニーズに合わせた継続的な支援が可能になると考えています。



これからの発達障害支援に向けて

1

自己理解から始める

特性を知ること生きやすさが広がる

∞

多様性を尊重する

一人ひとりの持ち味を大切に社会へ

共に

支え合う関係を築く

互いの特性を補い合う共生のかたち

私たちHIKARI CLINICは、これからも「愛される変人として生きる」ことを支える取り組みを続けていきます。発達障害のある方々が、自分の特性を理解し、受け入れ、そして活かしながら、社会の中で自分らしく生きていけるよう、医療的支援と社会的支援の両面からアプローチしていきます。

発達特性とはその人の好きなこと、苦手なことにとっても関係が大きいと考えています。ひとりひとりが自分の得意なことや好きなことを探究し成果を発揮し、苦手なことは苦手なこととして認め、周囲に「可愛げ」をもって理解を求めることが重要です。自分自身を愛し、自分の特性をうまく愛されるキャラに開き直れることで、その人らしく社会の中で居場所を作れるようになるかもしれません。